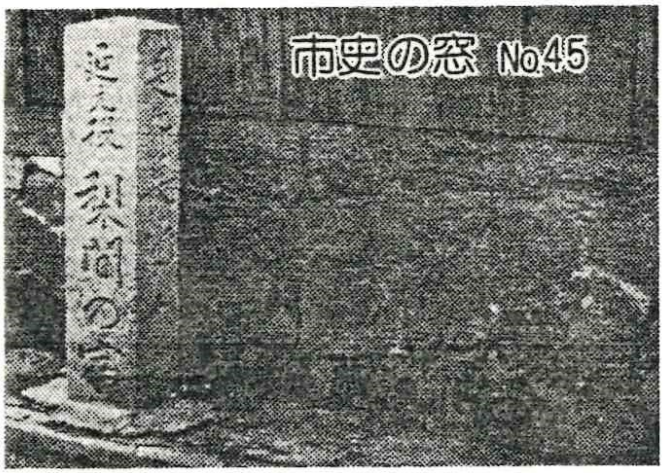


# 古（いにしえ）の大和街道

## ―平安京以後―

平安時代になると政治の中心地は京都に移り、交通路も京都中心に計画敷設されました。

大和街道の変遷をみると、第一期は奈良時代まで（前号をご覧下さい）、第二期は平安遷都以後秀吉の時代まで、第三期は秀吉の土木工事による変更までの三つに分けられます。

さて、都が京都に移ると大和へは木津川東西両岸の二街道が主に利用され、淀が平安京の水運の中心地となりました。

したがって、道路も京（みやこ）→鳥羽→與戸（淀）→淀川渡河→岩田→由辺→大和への西岸の道が重要視されました。

東岸の大和街道は、京→稲荷→桃山→宇治→栗子山越→久世→大和へと通じる街道も依然として利用されました。

『三代実録』をみると「天文二（八五〇）年八月令山城国国司警護宇治・與戸（淀）・山崎等の道・以東南西三方通路の要所也」と記され、大和街道の重要性が維持されていたことが理解できます。

その後、秀吉は伏見築城の際宇治川に豊後橋（現在の観月橋）を架け、その南方に小倉堤を新築し、この道を新大和本街道としました。この堤を槇島堤とか太閤堤とか呼んでいます。

この新しい大和街道の出現により、今までの宇治回りがなくなって大和への距離が短縮され、かつ淀道より洪水などの危険度も少ないので、再び東岸の大和街道が西岸の淀を通じる道よりもはるかに優れた街道になりました。

かくて、今までもっと不便であった宇治栗子山越や久世鷺坂越の山道を通る必要がなくなって、久世→長池付近の道筋は平地に近づき、ここに現在の旧大和街道が出現しました。

さらに、長池から奈良への道も観音堂→奈島→十六→多賀の三軒茶屋→玉水の渡とつづき、木津川堤に沿って木津まで達するようになりました。

この低地の大和街道は、以前の山麓を沿う古（いにしえ）の道に変って本街道となりました。

江戸時代には、この街道筋に伏見・長池・玉水・木津の宿駅が置かれ、京都と奈良を結ぶ街道として重要な役割を維持してきました。

この旧大和街道にほぼ沿って作られた新しい国道二十四号線は、この地域の開発と発展に大きな役割を果たしています。